開国外交に活躍した人々と万次郎　その１

―　（附）万次郎の晩年の謎についての一考察　―

塚本　　宏

はじめに

「文明開化」は明治近代からというのが、現代を生きるわれわれ日本人の常識となっていると言っても過言ではない。「歴史」は常に勝者の語る歴史で、敗者のそれではないというのも、また、もう一つの常識ではなかろうか。

しかし、このような常識を打破して、「文明開化は長崎から」だったとか、「徳川近代」は消されたとするとする、広瀬隆、原田伊織らの研究[1)、2)]に触発され、「幕末の開国」を見直してみたい。ここでは、開国外交に抜群の活躍をし、大きな功績を残した一群の先駆者たちの人物像に迫ってみることにしたい。なかには、現在では歴史の表舞台からすっかり忘れられている人物も多く、残念に思っているからに他ならない。

といっても、いわゆる「幕末の外交官」たちだけを取り上げているのは、「幕末・維新史」については全くの素人に過ぎない筆者の力不足によることを始めにお断りしておく。

もう一点、敢えてこのような試みに挑戦したのは、われらが中浜万次郎の「晩年を巡る謎」[3)]を解明するのに些かなりとも接近したいと考えたからである。

Ⅰ　万次郎が江戸で活躍するに至った二人の恩人

万次郎が漂流してから１１年ぶりに懐かしの故郷へ帰国したのは嘉永５（１８５２）年８月であった。折しも第１回のペリー遠征艦隊来航の前年に当たり、直ちに土佐藩から武士（「定小者」身分）に登用され、さらに慌ただしく出府を命ぜられ、幕府直参の旗本に出仕（中濱姓で）、江川太郎左衛門英龍（坦庵）の手附となり本所の江川代官屋敷に住むことになるまでの経緯は良く知られている。

しかし短絡して言うなら、万次郎のドラマティックな「立身出世」の陰に二人の恩人、大槻磐渓（ばんけい）と江川坦庵（たんあん）がいたことを強調しておかねばならない。ただし、この二人を「外交官」と呼ぶにふさわしいか否かに疑問を挟む向きもあろうかと思われるので、より丁寧に彼らが如何なる人物であったかを解説してみよう。

１）大槻盤渓（１８０１－１８７８）

万次郎を幕府に登用することを最初に進言したのは大槻磐渓であった。彼の恩師であり上司でもあった林大学頭復斎に宛た献策書「続献芹微衷」（嘉永６年６月８日付）[4)]には、まず、林復斎の指示で浦賀へ出向き、ペリー艦隊（第１回の入港は６月３日）を視察した的確で迅速な報告のあと、彼自身の終生ぶれない持論であった「開国論」を展開し、最後に「……土州萬次郎義は頗る天才有之者にて、米利幹滞在中、殊の外彼国の者に寵愛被致、学校に入。天文測量算術砲術等迄、皆伝相受罷帰候由。……此末米利幹人渡来の節、屹度御用に立可申、旁以萬次郎義は急々御召出に相成候様仕度候。」と結んでいる。

この進言を採用することに決めた林復斎は直ちに老中首座・阿部伊勢守正弘に推薦し、早くも６月２０日付で土佐藩・江戸藩邸へ万次郎「呼び寄せ」の辞令が交付される。土佐藩の江戸留守居役たちの驚き様が目に見えるようである。

国元も慌てて、万次郎を徒歩格に登用し、８月１日に高知を出発して、３０日には江戸到着、阿部正弘はもちろん、林復斎、川路聖謨、江川英龍ら側近幹部から海外事情につき諮問されたのであるが、幕閣の最高権威者が最低身分の武士に直接言葉を交わすなど異例中の異例の場面であったであろう、というのが定説となっている。

大槻磐渓が、それまで一度も会ったことがない万次郎という人物をどうして見出し、また彼を「天才」とまで評価した上、幕府に登用すべしと喝破できたのは何故であろうか。諸説あろうが、磐渓が阿部正弘以下幕閣の中枢から収集し得た精度の高い情報、なかでも当時、世上に流布していた「漂巽紀略」、「漂客談奇」（ともに嘉永５年）や「漂洋瑣談」（同６年）などの「写本」を渉猟し尽くしていた結果であると考えても無理はなかろう。

ここで大槻磐渓とはどんな人か、その人物像に迫ってみよう[5)、6)]。

盤渓は、享和元（１８０１）年、江戸時代後期を代表する蘭学者として有名な大槻玄沢（１７５７－１８２７）[7)]の次男として江戸で生まれた。

父の「玄沢」とは、解体新書で有名な杉田玄白、前野良沢の弟子に当たり、師である二人の名前から一字づつ貰った通り名であり、実は師の玄白から「解体新書」の改定を命じられ、８年かけて完成させたのが「重訂解体新書」（１７９８年、さらにその刊行は１８２６年）で、当時の医学界における偉業達成者である。また、江戸に「芝蘭堂」を開設し、多くの蘭学者の人材育成にも尽力した功労者でもあった。

幼名、六二郎、元服して平次と称した、磐渓は当然ながら学者への道を志し、１６歳の頃、幕府直轄の昌平坂学問所（昌平黌）の林大学頭述斎（林羅山を祖とする林家第８代、前出の復斎の父でもある）に入門し本格的な学問修行を開始。以後、２７歳までの１１年間、昌平黌で学問を続け（途中、仙台藩校・明倫養賢堂で指南役見習も務めるが）、生粋の「儒学者」に成長した。

転機が訪れたのは、父・玄沢の影響であろうか「蘭学」修行を目指し、長崎遊学を決意したことである（文政１０（１８２７）年）。各地の学者との交友を重ねて西下したが、特筆すべきは京都で頼山陽と面談することが出来て、彼から磐渓の漢文は「将来有望なり」との評価も受けている。

しかし、「好事魔多し」で長崎到着時に、父が病気で倒れたという早飛脚の知らせに接し、急遽長崎遊学を中断して江戸へ戻ったが、父は既に知らせを受けた時点で病没していたという不幸に見舞われたのである。

翌年、再度長崎遊学を実現させるが、今度は例のシーボルト事件でオランダ人との接触どころではなく、結局、蘭学修業は断念せざるを得なかった。彼にとって二度にわたる不運が重なったが、長崎滞在中、これまた有名な高島秋帆（１７９８－１８６６）との交友、師弟関係を結ぶという幸運を掴み取った。

時は進み天保１２（１８４１）年に、高島秋帆が武蔵徳丸が原（現・板橋区高島平）で洋式軍事訓練として「砲術演習」を行った際、磐渓も見学して「漢学は本業、西洋砲術を副業として文武両道たらん」と砲術家になる決心もする。

実に波乱万丈の人生を歩む人物だが、逸話にも事欠かないので、その二、三を紹介しておこう。

磐渓は、生まれて間もない長男を疱瘡で亡くしたことがきっかけで、主治医でシーボルトの弟子・伊東玄朴に種痘の実施を相談した（弘化年間のこと）。玄朴は、当時の日本では牛痘の種は得られず、人痘を試みたいが誰も乗ってこないのだと言ったところ、磐渓は即座に５歳の娘に試みたいと申し出て、良好な結果を得ることができたので、他の子どもたちにも皆、人痘を接種したのだが、世間では「大槻家はオランダ狂で子供を殺す」と悪評したという。根からの開明派であったことは間違いない。

また、森山栄之助（後述）とは漢学の師という間柄であったが、ある時、磐渓が蘭語について森山に質問したところ、自分は漢学の弟子ではあるが、蘭学に関しては私が師匠のはず、私に弟子入りしてから質問してくださいと言ったという。後日、磐渓は礼装して正式に入門の儀を済ませてから改めて森山に蘭語の質問をしたという[8)]。

いずれにせよ、広範な人脈を有する当時の最高のインテリであったことは間違いない。その実例として、「磐渓の卓越した人的ネットワークと素養によって」編集、作成された、黒船来航絵巻『金海奇観』（乾・坤二巻）のことを披露しよう。その詳細は、すでに２０１５年４月の例会で岩下哲典教授（当時・明海大学、現東洋大学・史学科長）にご講演[9)]頂いているが、重複を厭わず、絵巻の作成に直接携わった人物の一部を列挙しておこう。

・「題字」揮毫をした河田迪斎は、林家塾長で林復斎の配下として米国使節の応接に当たり、日米和親条約草案の起草を担当。

・ペリーらの肖像をスケッチしたのは、関藍梁（税所藩儒者）と高川文筌（松代藩・藩医で絵師）

・ペリー艦隊の動向を探索し報告図を描いたのは鍬形赤子（津山藩・御用絵師）

いずれも、現在の報道写真に匹敵するほど正確で具体的に描かれており、いわゆる文献資料では分かりにくい歴史上の具体像をより明確にしている貴重な史料であると評価される（加藤祐三・横浜市立大学・元学長，現・三渓園長）。

なお、「ペリー提督日本遠征記」として有名な米国政府の公式報告書の和訳を最初に手掛けたのが磐渓だったことも追加しておきたい。実は、軍艦奉行として咸臨丸を指揮した木村喜毅（１８３０－１９０１）は、盤渓の漢学の弟子で、サンフランシスコから持ち帰った上記報告書を盤渓に贈呈したものを、盤渓が女婿・手塚節蔵（手塚律蔵の養子）に依頼して翻訳させた「彼理（ペルリ）日本紀行」を仙台藩主伊達慶邦に献上している（文久２（１８６２）年）。言うまでもなく英学草創期における貴重な労作となっている[10)]。

既にお分かりの通り、磐渓は幕府官僚として活躍したプロの外交官ではなく、先見性ある思想家であり、当時としては全くの少数派に属する「開国論者」であった。在野の学者として活躍した彼の次男・大槻如電（１８４５－１９３１）のわかり易い解説を参照しながら、「開国論」の中身なるものを要約してみよう。

世論は武士も学者も攘夷一辺倒で、西洋人を夷狄、禽獣などと罵り、追い払い打ち払うことばかり喧しく唱えるなかにあって、敢然と世論に抗して自らの信ずる開国論を主張したのである。当然のことながら多数派からは種々の猛反撃を受けたが、彼の「持論」についての自信が毫も揺がなかったのは敬服に値する。同時に、幕府が倒れ薩長の天下になれば攘夷をするに違いないので、日本は滅亡しかない。この懸念から磐渓の開国論と「佐幕論」とは同根であり、後年の奥羽戦

争の抗戦主導者にも繋がる基になった。

磐渓は、封建的身分制的秩序イデオロギーとして体制教学化された「朱子学」の中心、昌平黌で学び林家との関係も深い。しかし、朱子学への盲目的な追従は全くなく、疑問があれば直ちに批判し主張もしたので、西洋人を野蛮人などとは考えず、むしろ彼らには日本人に無い合理的な新知識の優れた文明のあることを十分学んでいた。そこで開国して西洋諸国と交渉を持ち、その利益を得ることが日本にとって重要だということになる。ここには、父・玄沢の蘭学研究に没頭する姿を幼児のころから見ていたことが影響しているに違いない。

磐渓は既に、嘉永２（１８４９）年１０月に、斬新な開国建白書である「献芹微衷」を老中・阿部正弘に提出している（日米和親条約締結の５年前であることに注目）し、その後も嘉永６（１８５３）年にも幕府中枢や関係者あてに、二つの外交建白書、「米利幹議」、「魯西亜議」を提出している。その詳細を述べるだけの力量不足をまずお断りして、ほんのさわり部分だけを一、二紹介するに留めるが、いずれも当時の幕閣関係者に大きな影響を与えたことは言うまでもない。例えば、後述するペリーとの直接交渉で見事な外交手腕を発揮した林復斎などは、元来西洋嫌いで海外事情に疎かったが、これを読んでからは磐渓に急接近して彼の意を迎えるようになったという。

まず、「海防」について、現在では外国船が日本近海に出没して、海防の備えのない日本は不安でならない。急いで西洋の技術を取り入れ海辺に要塞を新築し、大小砲や軍艦を製造して対処しなければならない。徒に旧式武器だけで侵入を防ごうとしても海外から物笑い、軽蔑されるだけで嘆かわしい。

隣国との友好親善の必要性を説いているものの、端折って言うなら貪欲な植民地主義を排して「イギリス嫌い」の一方、王侯貴族の度量を重んじて「ロシア重視」の外交政策を提言している。後者については、やはり先年、父・玄沢がロシアへ漂流し帰国した大黒屋光大夫の助言を得て著した「環海異聞」の影響も読み取れよう。

いよいよ幕末を迎え、磐渓の身辺も慌ただしくなる。文久２（１８６２）年秋に藩主・伊達慶邦の命で藩校・明倫養賢堂（仙台）に戻される（副学頭から学頭に就任）。当時、藩内は討幕派と佐幕派との激しい抗争のさなか、勿論、佐幕派の磐渓は藩の執政に大きい影響力を持つに至り、実際に戊辰戦争期の指導者、但木土佐、玉虫左大夫などは彼の教え子であった。仙台藩が奥羽越列藩同盟の盟主になると、論客として「同盟盟約書」の執筆をして各藩の参謀と関わりもを持った。

戦争の結果、明治元（１８６８）年９月に仙台藩は降伏し敗北に終わる。主戦派の但木、玉虫らは斬首刑に処されたが、磐渓は高名な漢学者、かつ老体であったことから終身刑となり、明治３（１８７０）年には病気を理由に仮出獄を許され、さらに翌年４月には晴れて青天白日の身となった。

その後、磐渓は、江戸で静かな余生を送り、持論の文明開化の時代が到来、世相の移り変わりを見守って暮らし明治１１（１８７８）年に亡くなった。享年７８歳。晩年、一杯機嫌で（生来、大酒家であった）「それ見ろ。攘夷論で世の中が沸騰していた頃、俺が開国せにゃならぬと言っていた通りになったではないか。あの時、鎖国攘夷を唱えた者は、本当に世界の情勢を知らない大たわけだ」と怪気炎を上げたという[8)]。

２）江川太郎左衛門英龍（１８０１－１８５５）

中浜東一郎は、名著「中濱萬次郎傳」の緒言で、「万次郎の為に真の知己と称すべきは、幕末の偉人江川坦庵先生なりき、一たび先生の知遇を得るに及び、万次郎は其海外にて学び得たる所を傾けて、新日本建設の大業に参画し、汽船の製造に航海書の翻訳に海軍の創設に、海運、水産事業の開発に多大の貢献をなしたり」[11)]と述べている。まさに漂流後の日本における一番の恩人は江川英龍であったし、当協会・会員にとっても最も親近感を持つ人物であろう。余談になるかも知れないが、２０１６年１１月には、１８人もの会員とご一緒に伊豆韮山へ一泊二日の「特別旅行」をして「江川邸」、世界産業遺産の「韮山反射炉」などの見学をして彼の遺徳を偲んだ懐かしい思い出もある[12)]。

ここでは、坦庵の人物像[13)]を「外交」に焦点を絞って説明することとし、万次郎との個人的関係を詳述することは割愛するが、次の２点だけは書き落とせない。

①　　万次郎は当初、土佐藩主山内容堂の家来として出府したのであるが、幕府直参の旗本（御普請役格）に昇進、しかも江川坦庵の強い要望通り、彼の附人（高二十俵扶持）になったのは、すべて坦庵が老中首座阿部正弘を筆頭とする幕府中枢と直接交渉し、土佐藩とも折衝を重ねた結果であった[14)]。

②　　また江戸での住いも、江川の代官屋敷（本所亀沢町）であったし、有名な水戸斉昭からの横車的な日米交渉の通訳採用反対に対処するために、万次郎の結婚の世話をし縁談を纏めたのも坦庵であった（新婦・鉄は、同じ町内の剣術師範・団野源之進の次女、二人の長男が東一郎である）。

坦庵は、伊豆韮山の世襲代官の中でも最も有名な第３６代で、天保６（１８３５）年に代官職に就き、その所管地は２６万石にも達したが、当初より民政に励み、人材登用を行い施政の公正と人民の保育に努めたので、「世直し江川大明神」と地元民から崇められたという。

彼の所管地には伊豆、相模など海防の要衝が含まれていたことから、早くから海岸防禦について独自の海防論を持ち、度々建議書を提出している。嘉永２（１８４９）年閏４月に、突如としてイギリス軍艦マリナー号が相模沖に来航し、江戸湾内の測量を始めるという事件が起こった。

すでに弘化２（１８４５）年から常設された幕府の海岸防禦御用掛（通称、海防掛）に加えられていた坦庵は見事な働きを見せ一躍、外交における地位を強めることになった。それは、平素の質素な身なりとは打って変わり、蜀江錦の陣羽織に黄金づくりの大小を帯びた礼装で威儀を正し、政府の高官だと称してマセソン艦長と面接したのでイギリス側も坦庵の態度に敬意を表し、「退帆交渉」を難なく成功させたのである。

さらに、嘉永６（１８５３）年のペリー来航に当たり、勘定奉行吟味役格にすすみ、海防の議に参画して武・相・房・総、諸州の江戸湾防備を見分、品川台場の築造に当たり自ら指揮監督をした。また、翌安政元年の大地震で被災地見舞いのさなか、プチャーチンのロシア軍艦・ディアナ号が座礁・沈没したことを知り、直ちに伊豆の戸田で新造船にする一切の段取りを整えた。戸田滞在は数日に過ぎなかったが、彼の適切な指揮に始まる「戸田造船」は、日本海運史上に大きな足跡を残した。

坦庵は、このような超多忙の過労に加え、急ぎ出府の命に従い無理を押して出発、江戸に入り一時は小康状態に戻るも、死因は現在でいうインフルエンザから肺炎を併発したとされている。

約１か月にわたる、伊東玄朴、三宅艮斎ら１６人もの当時を代表する蘭方医総動員の手厚い医療の甲斐もなく、翌安政２（１８５５）年正月１６日、死去、享年５１歳とまだまだ働き盛りであった。

Ⅱ　開国に舵を切った総指揮者、阿部正弘（１８１９－１８５７）

言うまでもなく、１８世紀末から異国船の近海出没が多発するようになり、阿部の登場を待たずとも江戸幕府の対外政策は大きく変わり始めていた。強硬策の「異国船無二念打払令」（１８２５年のいわゆる文政令）を穏健策の「天保薪水給与令」に戻したのは、天保１３（１８４２）年であった。備後福山藩主・阿部伊勢守正弘が、２５歳の若さで老中に就任（江戸幕府に通算１７３人の老中が出たうち、最年少であったという[15]）する前年であり、ペリー来航を迎えるのは、これから１１年先のことになる。

続いて、弘化２（１８４５）年、老中首座（今日の内閣総理大臣に相当する地位）になると幕政改革を行い「海防掛」を常設の行政機関に変貌させ外交・国防問題に当たらせた。

もともと、阿部は独断専行型の政治家ではなく、バランス重視の「調整型指導者」と言ってよいだろう。すでに２０才前半の寺社奉行時代に、大奥女中と僧侶の破廉恥な事件（世にいう「感応寺事件」）を円満に解決して大奥の評判を得、その実績と手腕が買われ老中への抜擢に繋がったことからも容易に想像されよう。

また、自己主張を前面に出すより、人の意見をじっくり聞くタイプから、優柔不断で「瓢箪なまず」と噂されたほどであった。それは政治的な無能者どころか、情報収集力に長けて次々に着実に難題を解決できるタイプでもあった。明治期になり、現政権の優秀さを誇張するあまり前政権の業績を全否定するに等しい風潮が禍して、阿部をはじめ開国外交に献身、尽力した多くの人材が忘れ去られたのは残念でならない。

さて、阿部は「海防掛」に次々に大胆な人材登用を行って、彼らを立派な外交官僚に育成してゆくのである（個々の人物像は後述）。と同時に、薩摩藩主・島津斉彬、水戸藩主・徳川斉昭ら有力大名からも広く意見を求めている。ペリー提督からフィルモア大統領の国書を受領した際には、朝廷をはじめ外様大名を含む諸大名や市井の一般人にも知らせて、彼らからも意見を募ったが、封建体制下であるから今日の民主的な姿勢では有り得ないものの「万機公論に決すべし」を先取りするほど、開明的政治家でもあった。

また、将来、欧米列強と対等な国交が出来るよう、自ら「ヴィジョン」を立て、具体的な諸施策を実現させたことも高く評価したい。

いくつかの実例を挙げておこう。

① 防衛のために軍備を充実させるため、後の陸・海軍部隊に相当する「講武所」、「長崎海軍伝習所」）の設立
② 西洋砲術の導入と推進
③ 大船建造の禁の緩和（まず外国から大船・軍艦の購入を含む）
④ 蕃書調所（洋学研究機関で後の開成校の前身）の開設

⑤ 優秀な幕府官僚育成のため昌平黌の充実、等々

これら阿部の施策は「安政の改革」と呼ばれ、いずれも成功を収めている。なかでも阿部の人材登用によって、結果的にジェネラリストとテクノクラートが見事に補完関係をもつ優秀な官僚群が誕生し、明治近代へと継承されたのである[16)]。

良いこと尽くめのようだが、開国の決断に自信があったせいか、余りにも貴重な秘密情報を明かしてしまい、反って「尊王の志士」を名乗るだけの徒党らに乗じられたというマイナス点も指摘しておかねばならない。阿部は開国の扉を開くと同時に、近世の幕藩体制の崩壊を速めるのに手を貸したことにもなる。

いずれにせよ、開明派代表の老中首座であった阿部正弘が、最初にわが国の近代化への舵を切ったことに間違いなかろう。

彼は、これまた開明派の「蘭癖大名」と称される堀田正睦（まさよし）（１８１０－１８６４）に老中首座を託し、安政４（１８５７）年、老中のまま江戸で急死した。享年３９歳とはいかにも若過ぎる。死因は肝臓がんとも多事多難な開国問題の心労によるとも言われる。歴史に「ｉｆ」はあり得ないが、健在であれば幕末史は大きく書き換えられたと言うのが大方の見方であろう。

注

１）広瀬　隆『文明開化は長崎から』上、下、（集英社、２０１４年）

２）原田伊織『消された「徳川近代」　明治日本の欺瞞』、（小学館、２０１９年）

３）塚本　宏「『中濱東一郎日記』に見る晩年の万次郎」、『土佐史談、２５７号「中浜万次郎」特集号』、９３―１１０頁、（土佐史談会、２０１４年）

４） 川澄哲夫編著『中浜万次郎集成』、１０９－１１１頁、（小学館、１９９０年）

５）臼井勝美、高村直助ら編『日本近現代人名辞典』、（吉川弘文館、２００１年）

６）大島英介『大槻磐渓の世界　昨夢詩情の心』、（至文堂、２００４年）｛盤渓の詳細な評伝ながら、万次郎についての記載がない（「続献芹微衷」にも触れず）のが残念である｝

７）　前掲５）に同じ

８）朝倉治彦、三浦一郎編『世界人物逸話大事典』、（角川書店、平成８年）

９）「２０１５（平成２７）年度・研究報告，第６集」、９－２６頁、（中浜万次郎の会）

１０）池田哲郎「佐倉藩英学書志―奔放英学発祥期の一齣―」、日本英語学史研究会報告、１９６５（２３）、１－１７頁、（１９６５年）、（なお、その「序」は当然、磐渓の筆による美文調で、「日米和親条約の締結は、日本にとって福となり、単なる開国貿易という末事の問題ではなく、国体を変え軍政を改め富強の国にするもの（意訳）」と書かれていて（前掲６）、２４０―２４１頁）、彼の開国への熱意を感じさせるという。また、原著の「全訳」ではなかったことを申し添える。）

１１）中濱東一郎『中濱萬次郎傳』、緒言２頁、（冨山房、昭和１１年）

１２）「２０１６（平成２８）年度・研究報告，第７集」、１０８－１０９頁、（中浜万次郎の会）

１３）仲田正之『江川坦庵』、（吉川弘文館、昭和６０年）に詳しい

１４）前掲１１）２０６－２１８頁
１５）松尾龍之介『幕末の奇跡　＜黒船＞を造ったサムライたち』、２９頁、（弦書房、２０１５年）
１６）原田伊織『明治維新という過ち』［改訂増補版］、１６７－１７４頁、（（株）毎日ワンズ、２０１５年）